HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	御蔵島における生態系保全を目的としたイエネコ対策の実現可能性評価に関する研究
Author(s)	野瀬, 紹未
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(人間科学)
Dissertation Number	甲第16668号
Issue Date	2025-09-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16668
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98278
Type	doctoral thesis
File Information	Tsugumi_Nose_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）　氏名：野　瀬　紹　未

	主査　准教授	上　野　真　由　美
審査委員	副査　教　授	宮　内　泰　介
	副査　教　授	山　口　未　花　子
	副査　名誉教授	池　田　透　（北海道大学）

学位論文題目

御蔵島における生態系保全を目的としたイエネコ対策の実現可能性評価に関する研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、外来種問題の中でも特に解決の困難さが指摘されてきたイエネコの管理に関する実現可能性と課題を、日本国内の実例として「御蔵島野生化ネコ捕獲プロジェクト」を対象に検討した点に大きな特徴がある。世界では広大な島におけるネコ根絶の成功事例が蓄積されつつあるが、日本国内では未だ根絶事例が存在しない。その要因の一つとして、ネコが人間社会において伴侶動物としての地位を有し、他の外来種とは異なる社会的配慮が求められることが挙げられる。本研究はそのような社会的背景を持つネコ対策の現実的可能性を、科学的・社会的両面から分析し、対策の実行可能性を評価した点で、国内外の研究に対して新たな知見を提供している。特に第3章では、社会的側面に着目し、譲渡方式によるネコ管理の実現可能性を検討している。御蔵島では、島内外での一時飼養と本土への移送・譲渡が連動して進められており、島民・研究者・市民団体が連携してプロジェクトを担っている。このような体制により、捕獲から譲渡までの情報が一元的に管理され、プロセス全体を通じた詳細なデータの収集が可能となった点は、国内他地域に類を見ない特長である。一方で、行政機関や大規模団体の関与がないことにより、島内外の収容キャパシティが限定されているため、譲渡の進捗が捕獲活動に直接影響を及ぼすという深刻なボトルネックも存在していた。本研究では、島内施設の収容能力、定期船の就航率、移送担当者の確保状況、受入団体の収容力、譲渡の進捗状況といった要因を定量的に把握し、譲渡の円滑化に向けた課題と対応策を明らかにした。また、飼い主へのアンケート調査を通じて、譲渡成功に関わる要因を探索し、譲渡率の向上に向けた施策の必要性が示された。譲渡活動はネコの排除手段であると同時に、御蔵島と新たな関係性を築くきっかけともなりうることから、対策の社会的受容や支援獲得にも寄与する重要な手段であ

ることが確認された。第2章では、捕獲データとカメラトラップによる行動観察を組み合わせ、ネコの行動パターンやわなに対する応答を明らかにし、捕獲効率の最大化を目指した。また、個体数削減の効果が高いメスの捕獲戦術を検討するため、分布の性差をつきとめ、季節や捕獲地点、誘引餌の使用方法に応じた時空間的なわな配置を工夫した点は、個体群増加率を上回る防除効果に大きく貢献した。このように、本論文の成果は、ネコ根絶の可能性を検討するうえで必要不可欠な捕獲技術と譲渡方式の両側面から、現場に即した実証的なデータに基づいて対策の有効性と限界を明らかにした点にある。特に、小規模かつ限定的な体制の中でも順応的管理を重ねることで、ネコの個体数管理が達成できる点を示した意義は大きい。今後、御蔵島の事例は、日本国内で進められている他のネコ対策地域に対して、個体数削減に成功したモデルケースとして位置づけられることが期待される。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文は、「愛玩動物」と「生態系への脅威」という二重の社会的側面を持つネコについて、自然科学的側面として捕獲戦術の検討を行うと共に、社会的科学的側面として譲渡方式の評価を行った労作である。審査委員会としては、「御蔵島野生化ネコ捕獲プロジェクト」の企画立案・実施・評価の３役をこなした点を大きく評価した。さらに解析を行う上で不可避である膨大な数の自動撮影カメラ画像によるネコの個体識別の努力や洗練された解析手法の適用にも好印象を持った。しかし、以下の２点が課題として指摘した。第一に、イエネコの生態的影響や動物倫理に関する記述が不十分である点である。第二に、章構成として、本研究で示された成果が第４章（結論章）における議論で十分生かせておらず、章間のつながりが薄かった点である。もっとも、これらの課題の背景には、共同研究に伴う関係者の研究進捗に左右される要因や、ネコの倫理的側面を検討するためには捕獲や譲渡の枠を超えた多様な研究素材が必要であるという、現時点では回避することが難しかったことも考慮すべきであろう。なお、委員からの具体的な質問には適切に回答しており、また自然科学的側面と社会的側面の双方からアプローチすることで実現可能性の評価に説得力を持たせたという本論文の意義は、これらの課題によって損なわれるものではない。

本審査委員会は、以上のような審査結果により、全員一致して本申請論文が博士（人間科学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。